

小山 清著『国語教育の理論と実践』三〇五

国語教育叢書8 『教育実習の手引き』

— 国語教育の実践的研究 —

蓋し、名言である。

「それにしても、授業ほどむずかしいものはない。」これは、平成元年一月二十日発行された最新版、『国語教育の理論と実践』第五集の「あとがき」における著者の言である。この問題を解決する手だては、本書第一集と第五集に収録されている精緻

な論考の内部に存在する。

本書には、昭和五十四年六月に出版された第一集と第五集までの一貫した実践研究が展開されている。その意味で今回紹介する第三集と第五集は、『国語教育の理論と実践』をシリーズとして位置づけるための確固たる根幹となり得よう。

著者は、自身の鋭角的な読みを基盤に据え、多角的な視点からの教材分析を試み、実践に移している。その稠密さと新鮮さに満ちた考察は、各ジャンルにわたり、収載教材の豊富さと的確さにおいて、他に類書のないものとなっている。

著者は、指導のあり方について言及しながら、国語教育の本質について次のように記している。

「私は、このごろしきりに小説の指導はただ単に読解力を養うだけでなく、生徒たちの生きる力として働かねばならないと思うのです。すなわち、十年後あるいは、一生涯を通じて、生徒たちがいかに生きべきかと迷う時に、鮮やかに思い起こされ、その指針となるべきだと思ふのです。そのためには、生徒たちが機械的な受け身の学習ではなく、主体的に取り組む授業でなければなりません。」〔傍点は引用者〕（第三集・一一五頁・下段）

真の国語教育とは、一生涯にわたり、生徒一人ひとりの心の中で生き続け、育まれていくものなのである。

そこで、教師一人ひとりが冒頭の問題点

を解決するには、次に示すことが必要となる。

「教師はもっと授業力をつけなければならぬ。そのためには授業の基本方式を確立することが急務である。」（第五集・一六六頁・上ノ下段）

本書は、国語科教育の実践的研究の軌跡だけにとどまらず、今後の国語教育の歩みに大きな示唆を与える一書であるといえる。

また、このたび希望の国語教育叢書 8「教育実習の手引き―国語科教育の実践的研究―」が上梓された。本書は、さきの「国語科教育の理論と実践」第一集ノ第四

集までに収録された一〇四篇の中から、教育実習の指導にかかわりのある論考一篇を取り上げ、配列を工夫し若干の修正を加えた秀逸の著である。

(B6版・二二五頁・昭和六十三「一九八八」年六月一五日・三省堂刊・一、六〇〇円)

なお、「国語科教育の理論と実践」第一集ノ第五集の購入についてのお問い合わせは、左記の住所まで。

〒731-51

広島市佐伯区坪井二丁目二三八七番地

小山 清先生宛

(大塚 浩)